

英語教材としての児童文学の有用性

中村 愛人

(2006年10月5日受理)

Usefulness of Children's Literature as English Learning Material

Yoshito Nakamura

Is children's literature for children alone? No, of course. It is interesting in its own way and even exciting for adults, too. It depends on who reads what. Besides, it is very useful for learners of English as a foreign language. Hence our aim in this paper to examine and prove how useful it is mainly in terms of defamiliarization or foregrounding.

Key words: children's literature, English learning material, literariness, defamiliarization, foregrounding

キーワード：児童文学、英語学習教材、文学性、異化、前景化

1. はじめに

近年、中・高等学校の英語教科書から文学作品の使われる割合が著しく減少したのは既に周知の事実である。しかし一方では、文学作品の英語教材としての意義やその利用法に関する研究も着実に行われるようになって来ている。文学教材の意義については、様々に取り上げられているが、文学作品を通して他国の文化を学ぶとか教育的意義があるとかは別にして、英語教育の一番主要な目的と考えられる、いわゆる英語力をつけるための教材としては、どのような意義・効果が考えられるのだろうか。

本論では、文学教材として、文学の一ジャンルであり私たちが幼い頃から大なり小なり親しんできた児童文学の表現と、それに関連して、文学の機能としての異化 (defamiliarization) あるいは前景化 (foregrounding) を取りあげる¹⁾。

2. 異化・前景化

異化ないし前景化は、研究者、批評家などによって幾分ニュアンスの違いはあるが、敢えてまとめれば、私たちが日常見慣れて自動的な反応を繰り返すようになった事物に対し、逸脱した言語表現等を使うことによって新たな光を投げかけ認識させることであり、そ

れにより読者の注意はメッセージの内容 (what is said) から、むしろメッセージそのもの (how it is said)、つまり、言語表現へと向けられることになる。これこそ詩的機能ないし文学性の中心になるものと考えられている。

3. 詩における日常の言語と違う仕掛けの例と言葉の学習

ここで19世紀に活躍したイギリスの詩人ワーズワース (William Wordsworth, 1770-1850) の詩を、取りあげる。

I wander'd lonely as a cloud
That floats on high o'er vales and hills,
When all at once I saw a crowd,
A host of golden daffodils,
Beside the lake, beneath the trees
Fluttering and dancing in the breeze.

よく知られた詩 "The Daffodils" の第一連で、全体としては四連の比較的短い作品である。この詩人は、前の時代に盛んに行われていた、固定化した表現 (poetic diction) や形式に偏りがちな古典主義的作詩法に異を唱え、詩を日常の言葉で書くことを主張し実践した。なるほど、ほとんど易しい日常の言葉で書かれ、英語教科書に使われていたのも頷ける詩となっている。

しかし、易しそうに見えて、やはり日常の表現ではない。先ず、行の始めの語が固有名詞でなくても、文の始めでなくても大文字で書かれている。各行には、ほぼ規則的な韻律 (iambic tetrameter) があり、脚韻 (cloud – crowd, hills – daffodils, trees – breeze) が使われている。全体を通して “l” の音を含む語が多く使われ、流れるような基調音を響かせている。また、最終行の “Fluttering and dancing” も、風になびく水仙の群れの同じ様を描き出している。途中一度その流れが途切れるところがある。それは三行目で、突然眼前に水仙の群れが現れた驚きの瞬間であろう。一瞬流れが止まる印象的な瞬間となっている。一行目には比喩表現 (simile) が使われ、歩く「私」が空の雲になぞらえられている。最後の二行は二行連句 (couplet) になっていて、脚韻に加えて、“Beneath the lake” と “beside the trees”, “Fluttering” と “dancing” の対置も良い。他には、韻律のためか “wander’d” や “o’er” の工夫も見られるし、“vales” や “host” といったどちらかと言えば詩的な語も使われている。

表面的にいかにも日常の言葉で書かれているように見える詩も、日常の表現とどのように違うかを確認する意味で、比較的目立つ主な点を取りあげた。このような仕組み、異化の作用によって、読者は、詩の意味だけでなく、その表現へと注意を促され、それを味わい喜びを得る。仮定ではあるが、情報を伝える説明的な散文の場合と違って、詩などの文学作品の読みを通して必然的に表現に注意を集中することは、その表現の学習・獲得に寄与するのではないだろうか。

以上のように考えるなら、詩的表現は確かに言葉の学習に利用できる。一口に詩といっても様々であるから、学習に適した詩を選ぶことが重要になる。英語・表現のレベル、主題、長さなど学習者に合ったものを選びなければならない。

4. 言葉の学習における詩の問題点と児童文学

残された問題は、詩を通して触れることのできる英語の分量であろう。確かに長い詩もあるが、読み易さなども考慮に入れるなら、あまり選択肢は多くない。文学性が高く、表現の密度の濃い詩は、それなりの効果は期待できるが、言葉の学習に求められる多量のインプットとまでは行かない。

ここまで文学性、詩的表現などと論じてきたが、これは何も詩に限られたものではない。密度の違いはあれ、小説や劇など他の文学作品にも共通のものである。ここにある程度の知的年齢に達した学習者には教材と

して見落とされがちな児童文学の利用の意味がある。

5. 言葉の学習として「ピーターとウェンディ」を読む

スコットランド生まれの作家 J. M. Barrie (1860–1937) の生み出した永遠の子どもピーター・パンは、時代を超え国を超えて人気があり、劇として上演され映画となり絵本にもなり、また、ピーター・パン・シンドロームという心理傾向を表す用語にも使われるほどである。ピーター・パンの登場する作品は四つあるが、今回は、小説「ピーターとウェンディ」(*Peter and Wendy*²⁾, 1911) の前半部だけを取りあげる。

“All children, except one, grow up.”³⁾ 作品の冒頭の易しそうな一文であるが、一般の常識には反している。成長しない子供とは、死んだ子供なのか。どこか謎めいたまま物語は始められる。

ウェンディ (Wendy) とジョン (John) とマイケル (Michael) の三人の子供の母親ダーリング夫人 (Mrs Darling) についての叙述を見よう。“Her [Mrs Darling’s] romantic mind was like the tiny boxes, one within the other, that come from the puzzling East, however many you discover there is always one more; and her sweet mocking mouth had one kiss on it that Wendy could never get, though there it was, perfectly conspicuous in the right hand corner.” (p.13)

夫人の心を “romantic” と形容するのは良い。しかしそれが入れ子のようにになっていると言うのはいかなものか。“Chinese boxes” のようだと言っているらしいのだが、それはどのような心であろうか。どこか計り知れない、謎を秘めた深みのある心とでもひとまず解釈しておこう。次に彼女の口元の右端に “one kiss” があったと言うのは更に難問である。大人だったら、その唇でキスをしてもらいたいと思わせるような口元の様子とでも言うところであろうか。娘のウェンディでさえ貰うことのできなかつたものであり、夫のダーリング氏 (Mr Darling) も同様であったと言われている。

ダーリング夫人の “kiss” については、他にも幾度か言及されている。“... gayest of all was Mrs Darling, who would pirouette so wildly that all you could see of her was the kiss, and then if you had dashed at her you might have got it.” (p.18) これも彼女の踊りが激しくて魅力的な口元しか見えない位だったということであろうか。

乳母のナナ (Nana) が休みだったので、彼女が子供たちを寝かしつけ、その後椅子に座って縫い物をし

ながら居眠りをしてしまうのだが、その時ピーター (Peter Pan) がやって来る。“If you or I or Wendy had been there we should have seen that he was very like Mrs Darling’s kiss.” (pp.23-24) ピーターとダーリング夫人のキスとの共通点は、魅力的あるいは捕らえようがないという以外に一体どこにあると言うのだろうか。恐らくそのことと関連した記述が次に見られる。“... Mrs Darling never upbraided Peter; there was something in the right-hand corner of her mouth that wanted her not to call Peter names.” (p.28) 直接 “kiss” とは言っていないが、それを意味しているのは明らかだろう。彼女がピーターを悪く言わないのは、二人の間の共通点のためだと言うことらしい。しかし、その共通点が明らかでない。

ここまでダーリング夫人の “kiss” への言及を追ってきたが、結局それはどのようにイメージすればよいのか。このような叙述・表現に出会った時、幼い読者と大人に近づいた読者では、反応が違うのではないだろうか。前者の場合、新しい経験をどんどん吸収し続けている年頃だから、わかるかわからないかは別にして、それ程抵抗なくそのままに受け入れるのではないか。自分が登場人物の一人になって、夢中で読み進めている時には尚更であろう。ところが後者は違う。既にいろいろな経験をして知識もそれなりにある。どうしても自分の既有知識・スキーマを使ってできるだけ効率よく読みを進めわかろうとする。それで理解できなければ、表現に頼るしかない。それでも納得行く答えが得られなければ、先程のような、表現と既有知識の間で疑問の渦に巻きこまれてしまうことになる。つまり大人に近い読者の方が、児童文学の表現に対しては、それを前景化する傾向が強いと考えられる。更には言えば、彼らにとって、表現・言葉の学習の機会には、児童文学だからと言って幼い子供と比較しても決して少なくないと言えよう。

“kiss” については、ピーターとウェンディの間で面白いやり取りがある。“She[Wendy] also said she would give him a kiss if he liked, but Peter did not know what she meant, and he held out his hand expectantly.” (pp.43-44) ここでの “kiss” は、そのまま理解すればよい。ただ、ピーターは、生まれた日に両親の下から逃げ出したので、それが何のことかわからなくて、貰えるものならと手を差し出した。ウェンディは彼を傷つketくなくて、仕方なく代わりに指貫 (a thimble) を渡す。そういう類のものが “kiss” だと理解したピーターは、今度は “kiss” のつもりで、どんぐりのボタン (an acorn button) のお返しをする。あれこれあって、結局、二人の間では “thimble” が

“kiss” の意味で使われることになってしまう。その経緯は、そのままでも面白いが、二人の育ち、生活、家庭の存在などの違いがさりげなく示されていて、恰好の楽しめる場面となっている。

ウェンディに住所を聞かれたピーターは、次のように答える。“Second to right... and then straight on till morning.” (p.40) これでは、ウェンディならずとも変な住所だとあきれてしまうだろう。しかしこれはこれでその表現のままに理解する必要がある。実際にネヴァーランドに向かえば、その通りだとわかるのだから。

ダーリング家では、犬のナナが乳母として雇われている。ダーリング氏は、何かという心にも無く彼女のことを悪く言いがちだが、子供たちの世話にかけては人間顔負けの有能な乳母である。このナナが、乳母としてすることの一挙手一投足が、人間なら優秀な乳母の言動として流して読めるのに、犬故にある種の緊張感を生む。やはり説明の表現に注意を払って読み進めざるを得ないであろう。“It was a lesson in propriety to see her escorting the children to school, walking sedately by their side when they were well behaved, and butting them back into line if they strayed. On John’s footer days she never once forgot his sweater, and she usually carried an umbrella in her mouth in case of rain.” (p.16) ナナが子供たちを学校へ送って行く様子を述べたものであるが、人間の作業として読もうとしても、傘を口にくわえているところなど、決して犬であることを忘れさせてはもらえないようになっている。

“It was her[Nana’s] silence that they had heard.” (p.50) ダーリング夫妻がパーティに出かけた後、ピーターがやってきて子供たちを誘う。敏感に危険を察知したナナは、召使のライザを連れて現場に急ぐ。その間の沈黙を言ったものであり、矛盾したような表現が、見事にその場の緊迫感を伝えてくれる。

空想に満ちたこの作品には、妖精の誕生と死の話を始め、現実世界の知識では理解できない出来事や物事が次々に出てくる。ダーリング夫人が、子供たちを寝かしつけた後で、彼らの心の中を整理する場面は、いかにも自然に描かれていてしかもあり得ない話である。“It is the nightly custom of every mother after her children are asleep to rummage in their minds and put things straight for next morning, repacking into their proper places the many articles that have wandered during the day... When you awake in the morning, the naughtiness and evil passions with which you went to bed have been folded up small

and placed at the bottom of your mind; and on the top, beautifully aired, are spread out your prettier thoughts, ready for you to put on.” (pp.18-19) ここから、人間の心には良い面と邪悪な面の両方が存在するという認識を読み取るのも面白いが、この後に述べられている、人間の心の地図 (a map of a person's mind, p.19) という考え方もまた興味深い。ダーリング夫人は、子供たちの心の地図でピーターやネヴァーランド (the Neverland) の存在を知る。“Of all delectable islands the Neverland is the snuggest and most compact; not large and sprawly... with tedious distances between one adventure and another, but nicely crammed.” (p.20) そして、ナナの懸命の努力にもかかわらず、ピーターに連れられて家を抜け出した子供たちの冒険が、この楽しい島で繰り広げられることになる。

作品の5分の1程度を取り上げただけであり、それも、顕著な例だけを検討した。それでも、大人あるいは大人に近づいた読者にとって、異化・前景化をもたらす逸脱した表現が随所に見られた。それらは、ピーターの住所の表現やナナの沈黙などに見られるように、表現自体の逸脱、言い換えれば、日常の言い方とは異質な表現が使われている場合と、人間の心の地図とか犬のナナの有能な乳母振りなどのように、内容における逸脱とでも言える場合があった。何れにしても、最後に頼ることになるのは表現そのものであろう。そしてそこに言葉を学習する大いなるチャンスがあると考えられる。

6. おわりに

文章の読みには二種類ある。既にある程度知っていることを読む場合と、知らないこと、未知の内容を読み取る場合である。前者の場合は、既有知識・スキーマを活用し表現をガイドとして効率よく理解するトッ

プダウン的な読みである。後者は、当然、より難しい読みであるが、既有知識を活用するにしても十分ではなく、表現に頼り、それを正確に読み取ることによって何とか理解に到達するボトムアップ的な読みになるだろう。そして表現を正確に理解するためには、詩を読む時に典型的に見られるように、そこに含まれる様々な情報、例えば語の音韻情報、統語情報、意味情報などを総動員して取りまねばならないだろう。

ただメッセージの内容、即ち、物語を比較的そのままに楽しもうとする子供と違い、経験や知識を備え分別もある大人にとって、空想性・虚構性の強い児童文学の表現には、この後者のチャレンジングな読みが要求されることが思いの外多いのではないだろうか。児童文学が、言葉の学習にとって間違いなく有効な教材と考えられる所以である。

児童文学と一口に言っても、種類も豊富であり、表現のレベルも様々であり、やはり、他の教材の場合と同様、主題も合わせて、学習者にとって適切なものを選ぶことが肝要であろう。

【注】

- 1) ロシア・フォルマリスト、プラハ言語学派、R. ヤコブソンなど。日常言語の規範からの逸脱を文学性と論じ、言語表現そのものを前景化する機能を詩的機能とした。異化と前景化は必ずしも同じものとは言えないだろうが、本論では、特に差し支えはないと思われるので、厳密な区別はしない。
- 2) 元々はこのタイトルであったが、その後、馴染み易さのためであろうか、*Peter Pan* としても出版されている。
- 3) J. M. Barrie, *Peter Pan*, Penguin Books, 1967, p.13. 作品からの引用は全てこの版を使用した。以後引用文の後の括弧に頁数のみで示すことにする。